

令和7年度 総合教育会議

日 時 令和7年11月10日

午前10時00分開会

場 所 A301-302 会議室

1 開 会

○佐々木部長

本日はお忙しい中をお集まりいただき、ありがとうございます。

只今から令和7年度の総合教育会議を開催させていただきます。

本会議は、地方公共団体の長である市長と教育委員会が、教育政策について協議及び調整を行う会議であり、地方教育行政の組織及び運営に関する法律において定められているものでございます。私ども企画部が事務局をさせていただいており、本日の司会進行は企画部長の佐々木が務めさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

2 あいさつ

○佐々木部長

最初に佐藤市長からご挨拶をお願いいたします。

○佐藤市長

おはようございます。本日はよろしく願いいたします。

前回の総合教育会議の際に「ムトスの学び」について多くのご意見をいただきました。こどもが自分の中にある「好き」や「得意」を見つけるような学びだと話をする中で、「自己肯定感が全てのこどもに得られるかどうか分からない。つまりきもある。」という非常に大事なご意見もいただき、それを踏まえた教育大綱をまとめましたので、後ほど説明の際に見ていただければと思います。

本日のテーマである「こどもの体力」について、中学女子を中心に当市のこどもは平均値に届いていないというデータをいただき、以前から気になっていました。ただ、どうしたらこどもの体力が向上できるのか分かりづらいところがあり、教育課程や学校としてどう取り組むかは難しいと考え、体力をテーマとして取り上げることは今までしてきませんでした。今の自分の様子を見たときに、学力よりも体力があることが仕事をする上で一番大事なことではないかと思えます。自分のこども時代は通学距離が長いこどもは運動が得意であると感じていました。小中学校時代における基礎体力をこどもたちにつけてもらうには、学校生活だけでなくもう少し広い意味で捉えても良いと思います。総合教育会議において、教育現場の様子も含めて意見交換をしたいと思い、本日のテーマとさせていただきます。学校側ができることばかりではないテーマの気もしますので、話題が

広範に及ぶかもしれませんが、本日の議論が少しでもこどもの基礎体力向上につながればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○佐々木部長

ありがとうございました。続きまして、熊谷教育長からご挨拶をお願いいたします。

○熊谷教育長

長野県には「信濃教育会」という教員が作る研修団体があり、毎年行われる総会に初めて阿部長野県知事が参加されました。阿部知事からは「一人一人の可能性をどう引き出すのか」「未来を創造する力が必要」「長野県は新しい当たり前をつくる」という3点についてお話がありました。内容を確認すると、私たちが飯田市の教育大綱で目指している方向と同じ方向性だと改めて感じています。本日は前回の審議を踏まえてご意見をいただきますが、自信を持って進めていけたらと改めて感じました。

体力向上は、最近の課題ではなく以前からの課題であります。体力テストの結果が3学期となることから、学校でも取り組んではいますが、全国学力学習状況調査の結果が夏休みに出るようになってきており、位置付けが弱かったと反省しているところでございます。

世の中の変化とともに子どもたちの生活、学校教育、余暇の時間の過ごし方も変わってきており、その辺も含めて考えていかないといけないと思っています。今日はよろしくお願いいたします。

○佐々木部長

ありがとうございました。

3 意見交換

○佐々木部長

本日ですが、意見交換のテーマを2つ設定しております。「次期 飯田市教育大綱の策定について」と「こどもの体力の向上について」意見交換を行います。

(1) 次期 飯田市教育大綱の策定について

—今後4年間の取組の方向性の共有と理念の構築—

○佐々木部長

最初に「飯田市教育大綱の策定について」意見交換をお願いします。市長部局と教育委員会が円滑に意思疎通を図り、同じ方向性のもとで連携して効果的に教育行政を推進していくため、教育委員会の「飯田市教育振興基本計画の後期の取組」と市の総合計画「いいだ未来デザイン 2028 後期計画」の2つの計画をつなぐ新たな「飯田市教育大綱」を策定いたします。

令和6年度第2回総合教育会議では、事務局から素案を提示させていただき、皆様からご意見をいただきました。いただいたご意見踏まえ「飯田市教育大綱（案）」を事務局からお示させていただ

きますので、内容をご確認いただきご意見等お願いしたいと思います。ご承認をいただいた場合には、新たな飯田市教育大綱として決定いたします。それでは1つ目のテーマ「次期 飯田市教育大綱の策定について」企画部から説明させていただきます。

○澤柳課長

企画課長の澤柳です。私から飯田市教育大綱についてご説明をいたします。

前回の総合教育会議でお示した次期飯田市教育大綱（素案）との変更点を中心に説明させていただきます。

「ムトスの学び」を実践する上での基本的な方針として、前回の素案では3点お示しさせていただきましたが、今回の案では一文にまとめさせていただきました。前回の素案では、飯田市教育振興基本計画の後期の取組の『ムトスの学び』である、「問いや願いをもとに学びを深め、好きや得意を見つけて共感しあい、小さな幸せを積み重ねることで、地域を愛する人材を育む。」ということ。また、「いいだ未来デザイン2028」の基本目標3の「ねらい」である「子ども・若者が地域づくりに主体的に関わることで、自己有用感・自己肯定感を感じることができ、生き抜く基礎を育む」ということ。また、「市長部局と教育委員会が連携した『ムトスの学び』の実践により、豊かな暮らしの実現を目指す」ということ表記しておりましたが、これらを網羅した表現として、今回の案の基本方針に整理させていただきました。

また、前回の総合教育会議では『ムトスの学び』を進める上で、こども一人一人が満たされる欲求段階が違うことを理解し、一人一人に寄り添ってサポートしていくこと」「失敗を認め、失敗をむしろ勧めること」「それぞれ」や「つまずいてもよい」と表せると良い」といったご意見をいただきました。いただいた意見につきましては、「ムトスの学び」を実践していく上で大切な視点でございますので、『ムトスの学び』を実践していく上で「大切にすべき視点」として明記させていただきました。

本日ご確認いただいた後に、案をとり、飯田市教育大綱として策定したいと思いますのでよろしくお願いいたします。私からの説明は以上です。

○佐々木部長

只今の説明のとおり、基本方針を一文にまとめる中で、前回の会議における皆様からのご意見を大切にすべき視点としてまとめさせていただきました。ご意見、ご質問等ございましたらお願いいたします。北澤教育長職務代理者お願いいたします。

○北澤教育長職務代理者

前日も申し上げましたが、「ムトスの学び」を中心に据えて未来を創る方向性を示しており、非常に前向きな願いとなっており、とてもワクワク感が感じられ良いと思います。素案では基本的な方

針が3点になっていましたが今回一つにまとめられており、実は素案に「生き抜いていける基礎を育む」という言葉がありましたが、「生き抜く」ことはとても大事だけれども、「生き抜く」という言葉自体は、広辞苑で「苦しみに耐えてどこまでも生き通す」という意味になります。基本的方針に「生き抜く」という言葉を入れるのは強すぎるのではないかと思っていました。今回の案では「大切にすべき視点」として「個性や多様性を認めて生かし合う。一人一人を大事にし合う。」といった温かな表現で大事なことをまとめていただいているので、非常にスッキリしたと思います。

「ムトスの学び」の絵も前回よりも非常にスッキリして分かりやすく、私はこの案はとてもうまくまとめてあり良いと思います。前回から今日までに時間が経過していますが、「ムトスの学び」を学校でも非常に意識していただいております、様々な教育計画の中や多くの場面で授業改善も含めて意識が向いているので、ぜひこの案の方向で進めていただければと思います。以上です。

○佐々木部長

ありがとうございます。野澤委員お願いいたします。

○野澤教育委員

前にもお話したと思いますが、教育で子どもたちに一番やってもらいたいことは、志を立てることだと思います。前段になる部分もちろんあると思ってまして、「問い」や「願い」という言葉で素案のときも書かれているので、基本的にはすごく良い表現になったと思っています。

しかし、絵の真ん中の「問い」「願い」の「願い」のところに書かれている女性らしき人が母親に見えてしまい、親の願いで子どもを育てるのは疑問を感じます。素案だと女の子に見えますが、親子関係に見えるのが気になります。子どもたちが志を立てるにあたって、親や私たちや学校は多くの機会や共感といったいろいろなものを与えてあげることができますが、押しつけることはできないと思うので、その表現だけ気になりました。以上です。

○秦野教育次長

その視点は私どもも持っておりませんでした。「親子」という意味での表現ではありませんが、「問い」の人物が小さくて「願い」の人物が大きいので、親子と見えてしまうこともあると思いますが、「男女」として表現しました。

○熊谷教育長

大人も子どももという意図だったと思います。

○佐々木部長

修正できるようであればよろしく申し上げます。林委員お願いいたします。

○林教育委員

前回ご意見申し上げた、自己有用感・自己肯定感を「大切にすべき視点」に上手にまとめた

だいたと感じます。また、「基本的な方針」も一つとなり大変分かりやすい形になっていると感じます。絵も大変分かりやすいイメージ図だと感じております。基本的に気になるところはなく、「ムトスの学び」を表現した方針、教育大綱の案はとても良いと感じました。

○佐々木部長

ありがとうございます。麦島委員お願いいたします。

○麦島教育委員

私も基本的な方針が3つあったところから、1つにまとめられており、分かりやすく非常に良いと思います。また、「大切にすべき視点」として、一人一人に寄り添うような内容が明記されているところが非常に分かりやすいと感じました。野澤委員がおっしゃられた絵についても、よく見ると母と息子にも見えると思うので、「飯田市民誰もが」ということを表現できるように違った表現でも良いと思います。以上です。

○佐々木部長

ありがとうございました。こちらの方向性で良いというご意見をいただきました。絵の部分はこちらで預らせていただき、修正ということになれば修正させていただきたいと思います。それでは本案を次期飯田市教育大綱として策定いたしますので、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

(2) こどもの体力向上について

○佐々木部長

続きまして、「こどもの体力向上について」意見交換をお願いいたします。意見交換の前に教育委員会から当市の現状や関連する施策について説明させていただきます。よろしくお願いいたします。

○北澤教育センター所長

資料No.2「こどもの体力について」をご覧ください。体力は「生きる力」の土台となります。体を動かす「行動体力」と体を守る「防衛体力」に分けられます。こどもの体力とは、こどもが将来にわたって活躍するための土台になり、運動をするための体力（行動体力）と健康に生活するための体力（防衛体力）がございませう。文部科学省の新体力テストでは、運動するための体力（行動体力）に基づき、8つの要素からなるテストを行います。

体力が大切な理由として、こどもが将来にわたって活躍するための土台づくりということが言えます。身体や心の成長を促し、生活習慣病の予防、「生きる力」の土台となります。体力は学習意欲や集中力とも関連しており、こどもが将来にわたって活躍するための土台となります。

学校で行われている体育や保健体育の授業の役割は、学習指導要領の冒頭に書かれており、5つの分野にわたって「資質・能力」を高めませう。体を動かす時間だけでなく自分自身の健康を管理し、

生涯にわたって豊かな生活を送るための総合的な力を育成することに寄与しております。

体力の数値が低いと心身の健康や学習、社会性にも影響を及ぼす可能性があります。例えば、肥満や生活習慣病のリスク、運動能力・集中力・意欲の低下、ストレスに弱くなるなどが具体的に考えられます。よく指摘される原因として、デジタル機器の長時間利用（スクリーンタイムの増加）、「時間」「空間」「仲間」の減少による外遊びや運動機会の減少、不規則な生活、朝食を食べないことなどが言われております。

令和6年度の全国体力・運動能力・運動習慣等調査から当市の状況を見てみると、デジタル機器の長時間利用に関する質問として、「平日、学習以外で、1日にどのくらいの時間、テレビやDVD、ゲーム機、スマートフォン、パソコンなどの画面を見ているか」という質問に対して、当市の子どもたちは、長時間見ていないことが分かります。

外遊びや運動機会の減少に関する調査では、全国的に一週間の総運動時間（学校の体育の授業を除く）が0分の割合が中学生になるにつれて高くなり、特に女子の割合が高い傾向にあります。また、当市の子どもは、全国・県の割合よりも大きく、特に女子の割合が高いことが分かります。中学生の女子では体育の授業以外での運動時間が0分と回答した割合が22.6%になっております。

「不規則な生活、朝食を食べないなど」に関する調査では、「朝食は毎日食べますか。（学校が休みの日も含めます）」という質問に対し、ほとんどの子どもたちが「毎日食べる」と回答しており、「食べない日もある」を含めると95%以上となりますので、ほとんどの子どもが朝食を食べていることが分かります。

不規則な生活に関する調査では、「毎日どのくらい寝ていますか」という質問に対し、多くの子どもたちが7時間以上の睡眠を取れていることが分かります。県・全国と比較しても、当市の子どもたちの方が比較的長時間寝ていることが分かります。

体力が低い原因を調査した結果、全体を通してちゃんとした生活が送られていることが分かりました。

運動・スポーツが「好き」と回答した子どもは、総合評価が高い傾向が見られます。運動に価値を見出している子どもは、自分の評価が高くなくても、「好き」と回答する子どももいます。「やや好き」・「やや嫌い」よりも「好き」と回答した子の方が全体的に総合評価が高くなる傾向です。特に中学生女子では「やや好き」になりますと、D評価・E評価が一気に増加することが分かります。

「やや嫌い」「嫌い」になりますと、総合評価も高くなく、苦手だと感じる子どもが増えることが明らかです。いかに「好き」「楽しい」という良い印象を持ちながら育てていくかではないかと思えます。

部活動への加入状況として、飯田市全体、運動部、文化部の令和3年からの加入率の推移を示し

てあります。運動部も文化部も緩やかに下降しております。当市では、全国に比べて文化部に入部することも多いことが特徴的です。

次に「気候変動による体育の授業等への影響」として、「暑さ指数等により体育館の利用を制限した学校」や「小中学校の自校プールでの水泳授業の実施状況」を挙げました。

資料No.3「令和6年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査」によると、男子よりも女子の方が体力低下の傾向にあります。昨年度集計した結果によると、中学生女子における課題は従前より認識されていましたが、小学校5年生の女子が平成25年度以降で最も低い水準を示していることが分かりました。

資料No.4「体力向上プラン2025」とは、毎年各小中学校が長野県教育委員会スポーツ課と協力し、学校ならではの向上プランを考えてチャレンジしているものです。私からは以上です。

○佐々木部長

続きまして、こども未来健康部からこどもの体力の向上に関するデータについて説明させていただきます。

○山崎こども未来健康部長

こども未来健康部の山崎でございます。資料No.5をご覧ください。私からは3歳児健診の際のお尋ねや聞き取りを基に基本的な生活リズム、睡眠、栄養、外遊びの状況をまとめた資料について説明させていただきます。

まず、こどもの身体や脳の成長発達の基盤は生活リズムであり、人間の体は生活リズムに合わせて体を成長させるために必要な様々なホルモンが分泌されていることから、保健師が生後2カ月の際に各ご家庭に訪問し、生活リズムを整えることの大切さを伝えております。特に早寝、早起きをお勧めしており、具体的には朝8時頃までにカーテンを開けて部屋を明るくして目覚めさせること。夜は21時頃までに部屋を暗くして寝かせるように習慣づけることなどをお伝えしております。

生活リズム・起床時間の状況を見ると、3歳児健診で「朝7時までに起きる」と回答した割合は10年前の平成26年度は82.4%でしたが、令和6年度は89.9%となり、9割のお子さんが早起きできており、その割合はここ数年増加傾向にあります。3歳になりますと保育園に行く年齢でもありますので、しっかりと習慣できていると思います。「8時31分以降に起きる」と答えた3歳児は1%前後で推移しており、年間5人程度となっている状況でございます。就寝時間の状況を見ると、「21時までに寝る」と回答した割合は、10年前の平成26年度は59.1%、令和6年度は62.4%となっており、6割前後で推移しております。「22時31分以降に寝る」と回答した方は1%前後となっており、遅くても22時頃までには就寝していることが伺えます。起床時間と総合いたしまして、3歳児健診では早寝、早起きの習慣づけができていることを推察しております。

3歳児のむし歯保有率は年々減少しており、長年のむし歯予防の取組の成果が現れているものと感じております。乳幼児健診等での一括指導、予防歯科の普及、保護者の意識向上など様々な要因が複雑に作用しているものと考えられますが、保健師・歯科衛生士の地道な活動が成果を挙げていると感じています。むし歯のない3歳児の割合は令和6年度が94.2%となっており、年々増加傾向にあります。

「飲み込めない食品」は肉が多く、処理方法の工夫や噛む力をつけることが必要な食品であると考えます。日頃の栄養指導での聞き取りによると、「噛まない食品」は「うどん等麺類」、「噛めない食品」は「肉・野菜」などが多いようです。「食品をよく噛む」と回答した3歳児は8割で推移しております。15～16%のこどもが「噛まない・噛めない」と回答しており、5%前後のこどもが「飲み込めない」と回答しております。この結果から、食べることに對して2割のこどもが何らかの課題を持っている状況であると分かりますが、10年前から大きな変化はございません。離乳食が始まり、徐々に食材を固くして噛む力をつけていくことが必要であると感じております。

偏食のある3歳児は10年前と比較すると増加傾向にあります。偏食の食品は野菜が多く、この傾向は10年前と同様でありまして、野菜は苦み・酸味のある食品が多いことから、こどもが苦手な味であることが考えられます。

外遊びの時間について、2歳児相談では、5割近くが1時間以上2時間未満、4割弱が2時間以上となっており、約9割弱のこどもが外遊びをしています。3歳児では、9割以上が1時間以上遊んでいる状況が分かります。幼児期に外遊びをしない1番の原因は、基礎体力の低下と考えています。体力は動くことで身につく力であり、ゲーム等では身につくことができません。幼児期に外遊びや体を使って積極的に遊ぶことは、運動能力発達の基礎となり、幼児期以降の身体能力の向上、大幅な発達や自己肯定感やメンタル面、社会適応能力の向上などにつながると考えております。こども未来健康部では、生活リズムを整える重要性や飯田型自然保育での農業や野山での体を動かす経験を通じまして、各園で様々な取組が行われております。私からの説明は以上です。

○佐々木部長

当市の現状やこどもの体力に関するデータを説明させていただきました。

ここから意見交換に入ります。最初に今までの説明を受け、問題意識・課題認識について意見交換をお願いいたします。まず、佐藤市長からご意見をお願いいたします。

○佐藤市長

当市の中学女子の体力調査の結果が、全国や県の平均を下回っているため気になっていましたが、説明を受け、大人になって我々が必要としていたのは、「防衛体力」だと思いました。健康に生活するための体力と体力測定結果の体力は違うかもしれないと思いました。

それから、最近の学校行事の様子を聞いて、皆さんにご意見を聞きたいと思います。昔は勉強ができなくても運動ができる子はクラスでヒーローでしたが、最近はそのような場面が少なくなっていると思います。鼎小学校では、運動会のリレーがなくなりました。以前はリレーの選手に選ばれることはテストができることよりも高く評価され、そういう子が輝いていたように思います。現在の学校現場において、運動が得意な子に光が当たる場面はあるのか。運動が苦手な子への配慮もあるかもしれませんが、過度な配慮になっていないかという問題意識を持っています。この点について、教育委員の皆さんのお考えをお聞きしたいです。

○佐々木部長

教育長お願いいたします。

○熊谷教育長

体力の数値が低い原因として、時間と空間と仲間の減少という説明がありましたが、確かに一緒に運動や外で遊ぶ仲間をあまり見ないように感じます。デジタル機器の利用時間の増加といった生活環境の変化がありますが、当市の子どもたちはデジタル機器の利用時間が短いにも関わらず、なぜこのような状況なのか疑問に感じました。

3歳児の結果を見ると、早寝早起きでむし歯も少なく、保護者の皆さんの健康意識が高いことが分かります。しかし、小学校・中学校に進むにつれ状況が変化していることに疑問に感じました。

○佐々木部長

北澤教育長職務代理お願いいたします。

○北澤教育長職務代理者

市長から鼎小学校を例にお話がありましたが、最近の学校では、子どもたちが血湧き肉躍るような場面が減ってきているのが悲しいと常々申し上げます。

体力の問題は、学校、家庭、地域だけでなく、社会全体で考えるべき問題だと思っています。例えば学校に目を向けると、週休2日制への移行に伴い、教育課程が過密化してきました。かつては週4日ぐらい全校体育の時間がありました。クラスマッチで勝つためにクラスがまとまって、得意な子が苦手な子をカバーできるチームづくりをするといった血湧き肉躍る世界があったと思います。こうしたことは、人間関係の希薄さや不登校・不適應の増加といったことにも影響があるのではないかと思います。中学校では、登山の前にリュックサックの荷重を増やして1カ月以上かけて登校しました。それが基礎体力をつくるのに非常に貢献していたように思います。徒歩は当たり前、自転車通学は当たり前。今は熊や不審者への対策、塾通いなどの理由から親の送迎が増加し、日常生活で培われた基礎体力がなくなっています。夏休みのプールの開放も、気温上昇などの影響で中止になっている学校がある中で、外遊びの減少など様々な要因が複合的に体力をつける機会を奪っ

てしまっています。これは子どもたちや学校だけの問題ではありません。全学校の日課を見ると、特に中学では読書を週4日行っている学校が多くありますが、全校体育を行っている学校は皆無です。逆に小学校は、ほぼ全部の学校で全校体育を行っています。ただ、頻度は学校によって大きく異なります。学校では、ドリル、全校読書、人間関係づくりのスキルを養う時間も行っており、特に中学校では、体力が一番後回しに位置付けられている状況があると今回このテーマを考える中で改めて感じました。当市の結果報告書の分析に「学校に期待」と考察されていましたが、特に中学の過密具合からすると、学校だけに期待しても無理があると認識しています。以上です。

○佐々木部長

林教育委員お願いいたします。

○林教育委員

私もクロス集計の資料を拝見して感じたのが、少数ではありますが体力テストの点数が高くないでも運動が好きと感じる子が小学校にはいますが中学校になるとすごく減ってしまいます。小学校だと休み時間に「遊びに出たい」、「外に出たい」という気持ちから、競うように外に出ていくお子さんが多いと思います。必ずしも体力テストで非常に良い結果が出せる子でなくても、外で遊びたい、体を動かしたいという気持ちがあります。数字には出ないところですが、こういう気持ちを大事にしてあげたいと私自身は感じています。逆に中学生になると、運動や体を動かすこと自体があまり好きではないというのは少し残念に感じます。中学生の女子が、休み時間に外へ遊びに行こうとは確かにあまりならないのかもしれませんが、だんだん大人になっていく過程で「さあ遊びに行こう」と体を動かす方向に行かないのは社会的な課題であると思います。先ほど市長も言っていたが、好きなことをやるためには体力がないと何もできないしそもそも体力がないと健康でいられない、と歳を重ねるごとにヒシヒシと思います。正直言うと私自身も運動が得意ではなく、運動会も嫌いでマラソン大会も逃げたかったような子どもでしたが、体力をつけること、維持することがどんなに大切か歳をとって感じており、自分に合う体力のつけ方を大人になって学んできました。中学生のうちに運動嫌いにならず、どんなに苦手でも自分に合う体力のつけ方があると思うので、解決策は大変難しいですが、そのようなところを大事にしてあげたいと感じました。以上です。

○佐々木部長

ありがとうございます。麦島委員お願いいたします。

○麦島教育委員

私も佐藤市長や林委員がおっしゃられたように、人生において体力が本当に大事だと感じている一人であります。我が家は家族みんながスポーツをすることが大好きです。運動することで、気持ちを良い状態に保つために、より良い未来にするために、自分の体を大切にするためになど自分の

健康や心を豊かにするためにどうしたら良いか考えるからです。自分から主体的に未来に対して願いを持って過ごしていくため、一人一人が「ムトスの学び」を実践するためには、運動はとても大切な要素だと考えております。また、運動のメリットとして、頭が良くなるという効果があるそうです。神経細胞の維持に必要なBDNFという物質が出ることにより、記憶力が高まり、情動がコントロールされ、うつ病などメンタル疾患を予防する効果もあります。厚生労働省の基準では1日8,000歩を歩くと良いと言われており、「スタンフォード式人生を変える運動の科学」という著書の中では、「人は1日の平均歩数が5,649歩を下回ると不安や落ち込みの感情が増える」と書かれています。それを知っているか知らないか。小さいうちから自分を大切にする。幼少期の2歳3歳では十分な睡眠が取れており、規則正しい食生活、早寝早起き、歯磨きもできている中で、同じように運動習慣を意識することでより良い効果が生まれると思います。さらに、私にとって運動は人とつながることであり、何をしているかというよりも誰とやっているかがとても大切になると思います。長い人生において、人とつながること、運動する仲間ができることは健康に良いことだと考えております。

資料No.4に各小中学校の一週間の総運動時間が60分未満の児童の割合の記載がありますが、この割合は習い事や部活動で運動している時間だけなのかが分かりかねます。「通学距離が長いイコール運動が得意というイメージがあった」と先ほど佐藤市長がおっしゃられていたように、学校やクラブに所属して運動する以外にも十分に歩くことや動くことはできると思うので、そういう意識を親子や市民全員で共有することが大切だと考えております。以上です。

○佐々木部長

ありがとうございます。野澤委員お願いいたします。

○野澤教育委員

一つは、体力テストの信憑性に疑問があります。女子中学生ぐらいだと、できても実力を発揮しないのではないかと思います。仲間意識の方が強くて、自分だけが目立ってもしょうがないからこの辺でやめておこうという子も中にはいるのではないかと思います。数的に実力が完全に出ていないのではないかとされる節があると思います。なので、この数字を真に受けるよりも、別の観点で見た方が良いと思っています。

もう一つは、こどもは親の手助けなしで動ける行動範囲を広げていくと思います。ハイハイができるようになって、歩けるようになって、走れるようになって、自転車に乗れるようになって、バスで移動できるようになり、電車で移動できるようになり、そうやって行動範囲を広げていくことで自ずと体力がないと動けないと思います。しかし、社会行動的にいかなのかとは思いますが、今はそういう体験をしなくても全部スマートフォンでできてしまう可能性があります。社会性とい

う部分でいうと、本来行動範囲が広がっていくと徐々に社会性がついていきますが、バーチャルを体験することで社会性がどんどん失われているところがあります。なので、クラスの中でも運動のヒーローやヒロインになりたいと思わなくなっていると思います。我々のこどもの頃は、とにかく目立ってみんなの眼差しを浴びたいという「目立とう精神」という言葉ありましたが、そういうのが特になく、俺はこれができるが別にみんなに自慢しなくてもいいという感覚があると感じています。先ほど麦島委員がおっしゃったみたいに、教育現場でできることは、運動をしないと健康上良くないことをきちっと知識として与え、場や機会を作ること。例えば、車でシートベルトを着用しないと警察に捕まって罰金払います。でもシートベルトをしていない結果、事故で自分が重症になることや死ぬことは自分の責任です。体力や学力も本来は他の人に迷惑かかるという次元の問題ではなく自分の問題だと思っています。勉強してこういうことを知っていないと将来こういうことで大変なことが起きるとか、こういう知識持っていないとより良い道を選べないということをきちんと導いてあげることが大事であり、やるのは本人だと思っています。それがこの「ムトスの学び」だと思います。だから志や本来自分がしたいと思う心をきちっと育てていけば、体力も自ずと醸成される気がします。体力がないのは学校のせいだという保護者が出てきたとしたら、それは違うと議論になると思います。自分自身の問題であり、社会性が少しずつずれてきている感覚を持っています。どうしたら本人が自ら行動するようになるか。一生懸命場を作り機会や知識を与えてもそこに行き届かないことに根深い社会の問題があると思っています。以上です。

○佐々木部長

ありがとうございました。それぞれ委員の皆様からご発言いただきましたが、改めまして教育長からご発言をお願いいたします。

○熊谷教育長

それぞれ違った視点でご意見をいただき、参考になりました。昔は運動ができる子は不登校にならないというデータに基づかない感覚的な認識がありましたが、今はそうでもないと感じています。運動会の時間も短くなり、コロナ禍前と大きな変化があったと思っています。行事の中身だけではなく、価値観も変わってきており、学校・社会・家庭が一体となって取り組まなければ変わっていかないとお聞きしている中で感じました。体力の大事さについて、例えば「8,000歩以上歩くと記憶力が上がる」と聞くと、やる気になるこどももいると思いました。先日見学した保健体育の授業では、「薬を飲むときに、水以外の飲み物と一緒に飲んではいけない」といった話がありました。同様に体力の大事さについても授業で扱われていると思いますが、正面から取り組んでいる場面は、確かに見たことがないと感じました。具体的にどうするかは、今後取り組むべき課題として示していかないとはいませんが、誰かのせいというよりはみんなで同じ目標・目的・課題意識を持つこと

は大事なことだと感じました。

○佐々木部長

ありがとうございました。市長お願いいたします。

○佐藤市長

こどもの体力はいろんな習慣やちょっとした動作の繰り返しによって培われるものだとすると、親や周囲の大人が意識して環境を整えることが大事です。こども自身が自分のことを考えられる年齢になれば、自分の人生のために体力がどんなに必要かを学ぶ機会があっても良いと思いました。

保健体育の時間に「防衛体力」という言葉を教えるというよりは、体力の必要性について現代文の授業みたいに教えることもあっても良いかもしれない。

学校だけに期待しても無理があると思います。好き嫌いというよりは日常生活における環境が体力に大きく影響しているような気がします。

○佐々木部長

ありがとうございます。問題認識・課題認識についてご意見をいただきました。

次は目指す姿、望ましい在り方として、当面取り組むべき課題についてご意見をいただければと思います。北澤教育長職務代理者お願いいたします。

○北澤教育長職務代理者

今までのお話も踏まえると、取組は大きく2つに分かれると考えます。一つ目は「運動習慣を促す取組」、二つ目は「体力をつけることに挑戦する」ことです。特に「運動習慣を促す取組」は、学校だけではなく家庭でも運動や体力の大切さを理解してもらうことが必要です。例えば、生涯学習・スポーツ課が長年推進してきた「家庭の日」の取組があります。その中の取組として「本を読む」「お手伝いをする」といったことは強調されていますが、特に「汗を流す」といった取組を強調して呼びかけをすることが大事だと思います。

幼少期の取組として、当市ではやまほいくを推進しており、小さい頃から外で遊ぶ、起伏のあるところを走る、木に登るといった活動をしています。小学校では農業体験を取り入れた「みらい創造科」を実施する学校も増えており、そういう点では良い方向に進んでいると思っています。

ほとんどの小学校で全校運動を行っていると話しましたが、例えば、千代小学校のチャレンジマラソン」があります。1年生も毎日走った距離を記録し、グラフに貼り付けていくものです。「千代小学校から飯田駅まで15キロ」といった具体的な目標を設定し、自分の走った距離を足していくことで、最終的に飯田駅到達を目指すという取組をしており、日常的に少しでも運動する機会を確保する枠組みができています。

先ほど中学が課題であると話をしましたが、遠山中学校では生徒数の減少により、通常の部活動

は地域の方に指導をお任せする活動になっていますが、部活動の時間を「総合運動部」とし、生徒たちがやってみたい種目を決めています。大会への出場はできませんが、運動の楽しさや仲間とつながり、スポーツの楽しさを味わう時間をつくっています。

今後部活動の地域展開が進む中で、週の空いた時間を使って総合運動部のような活動をやっていくことは可能だと思います。その際に、生涯学習・スポーツ課が取り組んでいるスポーツスクールの出前型や体験型といった枠組みが生きるのではないかと考えています。先ほど野澤委員から、体力テストの信憑性の話がありましたが、20メートルシャトルランや50メートル走の持久力については、当市の子どもたちは中学生になっても決して低い数値ではなく、全国平均並みやそれ以上の結果を示しています。不思議なことに、当市の子たちは反復横飛びの数値が全部低い。学校現場でも分析し直していただく必要があると思います。必ずしも悲観する材料ばかりではないと考えています。これからみらい創造科が始まり、直接的な体験を通じて体を動かすことの意義を家庭や学校でも改めて見直していく必要があると思います。以上です。

○佐々木部長

ありがとうございます。林委員お願いいたします。

○林教育委員

既に学校でも取り組まれていることかと思いますが、自分自身の体験も含めて申し上げます。一つは、運動が嫌いになってしまう原因としては、他人との比較があると考えます。特に思春期は、恥ずかしさやできないことで嫌だなという気持ちが生まれると考えています。「嫌いな教科を好きになる方法、教えてください！」という本の中で、かつて運動が苦手だった方が、現在スポーツのコーチをされており、スポーツを続けられている理由は「自分の中の成長を感じる」ことだと書いていました。すごくできる子とそうでもない子とレベルを分けて体育の授業を行う学校は多くなっています。「自分なりの楽しさ」を見出す。他者との比較ではなく、自分自身の中で成長を実感すること。私自身も高校時代にうっかり入ってしまった運動部で、タイムがドンドン速くなる経験をしました。運動ができる人にしたら大したことではないかもしれませんが、できるようになる楽しさを体育の授業の中でも増やしていくことで、運動を楽しめる機会が増えるのではないかと感じています。

もう一冊最近読んだ本ですが「なんでわざわざ中年体育」という角田光代さんの本には、30数年運動していなかった作家が、仲間と飲むために走り始めたところ、走るのが嫌いで何か得をしている実感がないが実はフルマラソンを走れる能力があることが分かったということが書いてありました。自分は全く運動に向いてないと思い込んでいたが、「人間がかくも矛盾を抱えた生き物だと知った」と書かれていました。そんなに好きでもない競技が実は向いている可能性があり、そういう

可能性を見つけていくためには小中学校の段階で「これが得意」「これしかできない」「これしか好きじゃない」というのではなく、様々な間口を広げておくことが大事だと思います。いろいろなことを経験してみることで、「実はこんな運動が自分に合っていた」ということがあるかもしれません。苦手と思わず、様々な挑戦をすることが大事だと思います。

学校からのアプローチが有効だと感じた経験が2つあります。先ほど通学の問題が出ていましたが、自分のこどもが小学校に入学した際、校長先生が「小学校は歩いて登校するところです」とおっしゃっていただきました。それまでは私自身が小さい子ばかり抱えていましたので、どこへ行くにも車で送るのが当たり前だと思っていました。しかし、小学校の先生が「小学校は雨でもなんでも歩いて行かせるところです」と断言してくださったことが私の中で印象に残っています。もちろん、様々な事情で送らざるを得ない家庭があることも承知していて、保護者を責めるような形にはしたくありませんし、社会の問題や個々の事情もあるのでこれだけが正解とは思えませんが、「小学校は送迎する場所ではなく、こどもを歩かせる場所」と最初に植え付けていただいたことは大きかったと感じています。

もう一点。最近、中学2年生の息子が朝走るようになりました。運動がそんなに得意ではないですが、運動部に所属しており、冬場は部活動がなくなるため、どうしても体力が落ちてしまいます。顧問の先生が部員たちにアドバイスをしたところ、10人中2人か3人の心には響いたようで走るようになりました。個々のお子さんによっても何の言葉が胸に響くかは全然違うと思いますし、親が言っても走ろうとしないが、顧問の先生が「昔、優勝したときの子はみんな走っていた」という話をしたようです。本人が自分に必要だと感じるタイミングで素敵な声かけやアドバイスがあると、こどもは自分から走るのだと実感し、学校や先生からのアプローチも大切だと思います。

学校からのアプローチについて付け足しますと、体力テストの後にうちの子が「あと何点でひとつ上の判定にいった。握力を伸ばせば届くかも。」と言っていました。体力テストの結果表にも何を伸ばすと良いといったアドバイスは書いてありますが、具体的にどのような運動をしたら伸びるのかまでは示されていないのではないかと思います。先生によっては指導されていると思いますが、こどものモチベーションの向上につながると感じます。以上です。

○佐々木部長

ありがとうございました。野澤委員お願いいたします。

○野澤教育委員

私が小学5年生のとき、健康優良児として学校代表で市の大会に行き、たくさんの猛者がいて「ああ、とんでもねえ」と思って帰ってきた記憶があります。そういう機会も面白いのでやったほうが良いのではないかと思います。今はなくなってしまっているのがなんとなく悲しく思います。

学校で勉強している教科が実は全部つながっていると思います。例えば、運動にはリズム感が不可欠であり、音楽ができないと運動はできません。リラックスしたいときや緊張しているときに聴くリズムもありますし、応援ソングを頭の中で聴きながら自分で鼓舞することもあると思います。こうした観点から、全ての教科はつながっていると思うので、縦割り教科にならないような統合的な仕組みが、今度の学園構想の中のみらい創造科で実現できると雰囲気が変わるのではないかと思います。以上です。

○麦島教育委員

皆様の意見をお聞きする中で、私も林委員の意見に同感で、他人との比較が運動を好きになれなくなってしまう理由の一つに挙げられるのではないかと思います。どうしても運動は勝ち負けがつくため、負けることが分かっていると最初から挑戦しない子どももいると思います。団体や競技によっては勝利至上主義に走りすぎているところもあり、自分には無理だと考えてしまうお子さんがとても多いのではないかと思います。これから地域クラブへの展開が始まる中で、先ほど林委員もおっしゃったように、ランクやレベル分けをし、エンジョイというような誰でも運動に親しめる環境も必要だと思います。例えば、親子で楽しめる場や中体連と同等レベルの場、仲間づくりの場といったように、勝ち負けも大事ですが楽しみながら体を動かせるクラブや選択できるような環境があれば、多くの方が運動に親しめる機会を得られるのではないかと思います。

また、普段カウンセリングをしていてよく感じるのは、現代の親御さんは情報過多や核家族化の中で、しなければならないことやすべきことへの意識がすごく強いと感じています。小さいお子さんが基本的な生活習慣である食事、睡眠、栄養、歯磨きの数値が向上している結果のとおり、子育てをよく頑張っていると感じています。ただ、良かれと思って過指示・過保護・過干渉になっているとも感じています。失敗しないように、嫌な思いをしないようにという思いから、親が先回りやコントロールすることで、良い子を育てるのが理想的な子育てという認識となっており、こどもの主体性、想像力、エネルギーが奪われてしまっていると感じます。自分の意志がなくなり、指示待ちや自分の行動に責任を持たず人のせいにするお子さんが増えています。子どもを遊ばせておいて自分はスマートフォンを見ている親御さんもとても多いです。子どもに対してアンケートをするのではなく、「お母さんやお父さんも一緒になって遊んでいますか、運動をしていますか」といった調査を行い、結果と連動するような統計が取れると違ってくると思っています。

家の居心地が良過ぎるため家から出ない。家の中に十分楽しいことがあります。運動をしなくても十分人生が楽しめる環境になっています。いかに運動することが良いことなのか学ぶ機会が持てたら良いのではないかと思います。以上です。

○佐々木部長

ありがとうございます。それぞれの委員の皆様からご発言いただきましたが、それを受けまして教育長からご発言をお願いいたします。

○熊谷教育長

本日はいろいろな視点でご提案をいただき、関連する本をご確認いただくなど改めて気付かされました。まだ十分整理できていない部分もありますが、学校だけではなく、保護者も含めた大人の皆さんの意識を高めていくことが大事だと感じました。しかし、そこが一番難しい課題でもあると思っています。学校の役割として、こどもの成長や自分を見つめる機会・場をつくることは大事なことだと思っています。一方で、運動が嫌いになる原因が他人との比較であるとする、リレーで勝った子がヒーローになるような場面が減ってきており、他人と比較されなくなり、運動嫌いになるこどもが減り、体力が向上するはずですが、実際には逆の結果になっている気もしており、難しいと感じています。部活動の地域展開が進む中で、運動が得意な子や好きな子はどんどんやる一方、そうでない子は学校で運動する機会がないとますます運動しなくなるのではないかという心配もあります。特に女子中学生は運動部への加入率が低く、それも影響していると考えられます。地域展開後は運動する機会や意識付けをしていく必要があると思いました。具体的には、握力・反復横跳び・柔軟性の3つが共通して低い結果となっています。学校でも原因を分析し、どうやれば握力が高まるかといった自己分析の機会にもなると考えます。体力テストを実施するだけではなく、その結果を生かした指導が改めて必要だと感じました。

○佐々木部長

ありがとうございました。市長お願いいたします。

○佐藤市長

自分でテーマを提起しましたが、まとめるのは難しいと感じています。皆さんのご意見から「親子で」というキーワードを感じました。こどもの体力向上については、親子で一緒に取り組むことで楽しく取り組めたり、親の体力づくりにもつながり、親から子どもに体力の大事さを伝える機会にもなります。「わが家の結いタイム」で親子や家族で取り組むことを呼びかけていくこともできると感じました。

もう一つは、今までとは違うアプローチで、教科を越えた取組もあると思います。体力向上を真正面ではなく、親子で一緒に取り組むことや縦横につないでみることなのかなと聞いていました。いろいろな組合せや楽しさを大事にして、様々な場面で多くの人が意識して取り組むことで、こどもが生きていく上で必要な体力をつけてあげられるのではないかと思います。今日はこども未来健康部と教育委員会が参加しておりますが、他の課でもやれることがあると思いました。ありがとうございました。

○佐々木部長

ありがとうございました。一通りご発言いただきましたが、全体を通してご発言ございましたら
お願いいたします。

—発言する者なし—

○佐々木部長

意見交換は以上とさせていただきます。

4 その他

○佐々木部長

ご意見のある方いらっしゃいますか。

—発言する者なし—

5 閉 会

○佐々木部長

長時間、活発なご意見をいただきまして大変ありがとうございました。以上をもちまして、令和
7年度の総合教育会議を閉会させていただきます。ありがとうございました。

閉 会 午後 11 時 45 分